

【令和5年度 後志教育講演会】

## 「あなたは気持ちを言葉で表していますか？」

－よりよいコミュニケーションを目指して－

令和5年8月2日(水) 倶知安町文化福祉センター

講師：東洋大学名誉教授 坂 詰 力 治 氏



皆さん、こんにちは。初めまして。お暑い中、大勢の皆さん方がお集まりいただきまして、厚く御礼申し上げます。

私は、実は埼玉から参りまして、今頃埼玉は38度ぐらいあるんじゃないかと思うのですけれども、連日38度前後の暑さが続いております。

そんな中で、お邪魔したものですから、ただ、先ほど御紹介いただきました木村様のお話ですと少しは涼しいですよという、そういうメールをいただいていたのですけれども、そうかなということで、半信半疑でお邪魔いたしましたところ、なるほど涼しいのですね。

ところが、今日は時間が時間ですので、一番1日の中で暑いちょうど時間帯でございます。控室で待たせていただきましたときに、あ、涼しいつもりでいたのですけれども、だんだんだんだん汗がにじみ出てきてまして、いや、これはちょっと大変だなと思いつつながら、実はこの前のそれぞれ御挨拶がありましたときに、話を盗み聞きさせていただきながら、風の通りのいいところで少しお話を聞かせていただいていたいました。

そんなわけで、このような暑い中で、毎年開催されております教育研究センター、すばらしいことだと思うのですけれども、日頃御出席で皆さん方は現役で教員を、あるいは教職員に従事しておられる方がいらっしゃるかと思いますし、かつてはそういう教育職についておられた方も本日御出席かと思えますけれども、今日お話しさせていただきます内容は、あまりにも当たり前のことで、多分皆様方は何のために今日はこちらに来たんだろうという、そういう思いを抱きながらお帰りになるのではないかと思いますのですけれども、ただ、その辺のところはぜひお許しいただきたいと思えます。あまりにも新しいものが何もございませんので、ぜひその辺のところだけは、前もっておわびしたいと思えます。

実は、この倶知安というところは、後志という地域にあるのですね。私自身、国語に従事しながら、10月にはまた地元の浦和というところで漢字についての「漢字の姿と形」ということで、少し自分の専門に近いような話をさせていただくことになっているのですけれども、そんな立場でありながら、後志っていうのが最初読めなかったのです。確

かに言われてみれば後志だなというような状況でありまして、そんな中で、推して知るべしです。まさに、推して知るべしです。そんな程度の人間がこれからお話するわけですから、皆さん方のお役に立つようなことはございません。

ただ、日頃皆さん方が感じておられるようなことを、あるいは直面するようなことを具体的な事例としてプリントさせていただきましたような形で紹介させていただき、それと同時に、このようなケースの場合に、皆さん方であれば、どのような対応をするのだろうかというようなことで、幾つか事例を掲げさせていただきました。

そのプリントの最初のところに、導入として、コミュニケーションの導入としてのことが1行加わっていますけれども、それは実は本会場で最初に御出席の皆さん方に白紙の用紙をお配りして、そして、そこに、ある絵を描いていただくつもりでいたのです。こちらから、申し上げるその言葉に従って、絵を描いていただくつもりでいたのですけれども、実はそのような描くところはございませんというお話を伺ったものですから、そこでちょっとそのことはやめることにいたしまして、直接事例のほうに入っていきたいというふうに思っておりますけれども、それはどういうことかと言いますと、私たちが実際に朝起きてから寝るまでコミュニケーションをしないなんて人はいないわけですね。コミュニケーションといっても、いろいろなコミュニケーションが考えられますけれども、最も手短なことは、まず挨拶であります。人と人が会ったときに最初に交わす、朝起きて家庭の中でおはようございますというような形で毎日毎日を私たちは送っているわけですが、そんな中で、昨今、そうした挨拶、家庭内の挨拶一つできないようなそんな状況がだんだんだんだんと続いていて、ある程度もう当たり前化している、常態化しているということでもあります。もちろん、今日ここに御出席の皆さん方の御家庭にありましては、そんなことないよということかもしれませんけれども、そういう家庭もまだまだ多かろうと思っておりますけれども、ともするとそのようなものがだんだんないがしろにされているわけです。

朝起きて、今日のごみを出す日なのだとということで、ごみを集積所に持っていきます。そのときに、御近所の方に会うわけです。そのときに、自然とおはようございます。暑いですね。お元気ですかという言葉が自然と私なんかの場合には年のせいかわかりませんが、小さいときからそういうようなことは当たり前のこととして育ってきているわけですね。

ところが、昨今、多分皆さん方も現実に日々の御自分の御家庭の周りのそういう様子などをお考えになったときも、そういえば、ひょっとしたら、そんなことあるかも知れないなということかもしれませんけれども、そうしたことから始まりまして、コミュニケーションというのは、必ず言葉をかけたほうとそれを受け止めるほうという、そういう関係が成り立つわけですね。一方通行のコミュニケーションというのは、もちろんあります。そういうものはありますけれども、その場合には、受け手からその言葉は何も返ってきません。返ってこないことに対して、私たちはどういうふうにそれを思うかということだろ

うと思います。その受け止め方は様々だろうと思いますけれども、返ってこないのが当たり前なのだというふうに受け止めるか、あるいは何だ、せつかく挨拶したのに、挨拶1つ返してくれないのか、というようなことであります。

私は、今、川越という、小江戸川越、よく最近ではテレビなんかでも結構川越は出ております。その川越に実はもう50年そこへ引っ越ししましてから住んでおります。その前は千葉県の市川市に住んでおりました。市川の国府台というところでありまして、そこに住んでおまして、そこから川越市の今のところに移ったわけでありまして、全然違うのですね、地域差というものがあるもので、私はまだ若かったですけれども、その川越市に移ったときに、一番びっくりした今の私の住んでいる地域は、これはかなり地主さんが多いのです。畑を持っておられて、それで、地主さんが多い。私は、今、川越市岸町というところに住んでいるのですけれども、世帯数的には300ぐらいあるのですね。もちろん1丁目、2丁目、3丁目まであるのですけれども、2丁目というところが一番大きなところなのです。ところが、その2丁目には、まさに公民館すらないような状況でありました。今はあります。今はありますけれども、そういう公民館はどっか空き家になったその家をそのまま公民館として使っているような、そういう状況でありまして、したがって、もう最近は大分世代交代ということもありまして、担っている、町内を担っている人も変わってきておりますけれども、非常に保守的なそういう人たちが集まっているわけです。ですから、私のような全く見ず知らずの人間がそこに引っ越したときには、本当によそ者扱いもいいところでありまして、それは当然と言えば当然なのですね。

そんな中で、私はもっぱら仕事はもう大学のほうに行く、行ったり来たりだけの毎日でありましたから、多分家の者は随分苦労したのではないかと思うのですけれども、大学の教員なんていうのは、時間が必ずしも小学校、中学校、高等学校の諸先生のように朝早く出て、そして夕方、一定の時間にお帰りになるというようなことではありません。私たちのときには、今も大体そうだろうと思いますけれども、大体自分の授業のある時間に合わせて、それ以外の会議があるときには一定の時間に行かなければなりませんけれども、そうじゃないときには、その授業時間に合わせて出校するということであります。ですから、その時間に合わせて、私なんかは大体10時か11時頃出かけたり、あるいは午後から出かける。私の大学は夜間部というのがありましたので、1部、2部というように夜間部もありましたので、夜間部のときは夕方3時か4時頃出かける場合があるのです。そうすると、私はもともと格好悪い人間ですが、茶色い変なカバンをショルダーのような形で肩から垂らしながら出かけていくと、近所の人は何て言ってたか。もちろん私自身にはその声は入ってきません。ところが、私の家の者の耳に入ったのは、どういうことかということ、お宅の御主人は何かそういうあれですか、産制器具か何かを売っておられる方なんですかというようなことでした。実は、こういうことを言われたのだということを経験から言われて、いいじゃないのと、そうですよと言っておけばいいじゃないですかというようなことで、しばらくの間、私は産制器具を売り歩いている人間として地元の人には思わ

れてきたわけです。

ところが、それからだんだんと住み着いている間に、いつの間にか、例えば近所に、近所の魚屋さんへ行くと、どこでどういうことで耳にしたのか、うちの者が魚屋さんに行くと、先生、今日は何ですかと言われたと言うのです。先生って、あんた、先生なのというようなことで、そんなような形で今のところに定着していったわけですが、その後、今の住まいのところでびっくりしたのは、私が大体皆さん方の場合も、朝起きて、今もう御定年を迎えた方もいらっしゃるでしょうし、どちらかというと、年配の方が中心ですから、ごみ当番などの場合、奥さんに出させるのではなくて、御主人がごみ置場まで出しに行くというのが一般的ではないかと思うのですけれども、ところが、私もその皆さんの御家庭と同じように、大体朝ごみを出しに行くのは私というふうに決めているわけですね。ところが、ある朝、私のごみ出しに行こうと思ったら、隣の御主人がごみをやり出しに行くのにぶつかりまして、一緒に歩いて、そしてお隣のもう少し先の御主人とまたすれ違ったわけです。そのときに、両隣の御主人はお互いに片方の方は東京都の消防署員、もう片方の方は郵便局の局長さんだったのです。私は当然その場でお会いしたものですから、おはようございますというふうに挨拶を向けたわけです。ところが、何とそのお二方はほんの目と先なのですが、お互いにどういう態度を取ったかという、すれ違っていても、お互いにつんという状況なのですね。それでびっくりいたしました、あ、こういうものなのだということをつくづく感じました。それはまさにコミュニケーションそのもの、言葉ではコミュニケーションなんていう言葉は、これは立派かもしれないかもしれませんが、このコミュニケーションを生かしたそういう日々の生活がどの程度定着しているかということでもあります。今、私たちが何かあるとコミュニケーションが足りないですねというようなことを言います。日常、いろんな新聞とか、テレビなどを騒がしているような事件などは、全てコミュニケーション以前の問題であります。お互いにコミュニケーションを交わしていれば、そんなことは起きないはずなのになというふうにするようなことが、それ以前にまず実行なのですね。気に入らないとすぐナイフなどで“ぐさっ”という、そういうような行動に出るのがむしろ今の世の中ではないでしょうか。

そういうことを考えますと、私に言わせると、まさに現在はコミュニケーションロス時代だろうというふうに思うのです。

それで、私自身がかつて思いやりのコミュニケーションというような有斐閣という法律の専門書を出しているその本屋さんから新書が出るというので、そのときそに新書版に敬語について何かということ、その話の出る前に、たまたま日本テレビか何かでお昼のその番組の12時からの番組に、みのもんたさん以前の日本テレビの、あのときにはちょうど走れコウタローなんていう、多分時代的に今日御出席の皆さん方も、あ、それ知っていると、そんなものあったなという御記憶の方もいらっしゃるかと思いますけれども、その走れコウタローのその方が司会をしておられるときに、日本テレビからコミュニケーションということではなくて、敬語の本をだした、その敬語のことについて話してくれないかと

いうことで、30分でありましたですけれども、お昼のちょうどゴールデンタイムに日本テレビにお邪魔しまして、そのときちょうど私のおふくろが糖尿病ですぐ近くの慶応病院に入院しておりまして、その入院の見舞いがてらちょっと、じゃ、行ってみますということで、御返事して、敬語に関する話をしたことがあったのです。

しかし、それ以来そういうテレビに出演したというだけで、何社からの出版社からいわゆる啓蒙的な敬語に関わる本を出してくれませんかということでしたが、きっぱり断りました。私は、そういう立場の人間ではありませんので、あくまでも教育的な立場、観点からこういうことをやっていますので、専門は日本語研究です。日本語史の研究をしておりますということですから、そうした啓蒙的なものに顔出しするつもりはありませんということではっきりとお断りしました。それ以来、どういうわけか、すっぱり来なくなりましたですね。

実は、私が東洋大学を定年退職する寸前に、皆さん御承知の、これは今売り出しているタレントさんから、やはりTBSかなんかのテレビ番組に出てもらえませんかということで、大学近くの巣鴨の駅の喫茶店でお会いしましょうという連絡があったのです。私は非常にそういう点ではつまらない人間なものですから、そういうものに乗っかってればいいのかすけれども、そういうことは二度と私はやりませんからということでお断りいたしました。

そんなような誘いをつい定年になる直前に受えましたですけれども、ただ別にそれが自慢だとかなんとかということではなくて、自分の本分はあくまでもこういうところにあるのだという、それだけは失いたくないなということで、自分は筋を通してきたつもりなのですけれども、しかし、所詮中身のない人間ですから、どんなにそんなような気構えでいても、自分は自分で行くほかないなということで、そのまま通してきておりますけれども、本日このような形で皆さん方にこうしたタイトルの下にお話しさせていただくのも、これも元をただせばそんなところからひょっとしたら発しているのかなというふうにも思わないことはないのです。あのとき気持ちよく引き受けていれば、今どきはしょっちゅういわゆる民法のテレビの、大変失礼な言い方になるかと思えますけれども、ああいうような番組のお笑い番組の中心というか、そういうところにひょっとしたら出ていたかもしれません。

それはともかくとして、そんなようなことで、私はたまたまこういうようなことに専門外であるのです。専門外なのですけれども、たまたま取り組んだことがコミュニケーションということに関わったものですから、コミュニケーションに関わるような話をさせていただく機会を持つようになったわけでございます。

実は、倶知安というところは、先ほど関係者の方にちょっとお話させていただいたのですけれども、もう今から50年ぐらい前の話になりますけれども、学生時代に私の友人が岩内におりまして、その岩内から東京のほうに彼が出ていたものですから、その彼が岩内に帰るといえるときに、一緒に来ないかということで、岩内にお邪魔したことがあるのですね。そのときに岩内から東京に帰るときに、バスで倶知安に出たことがあるのです。その

ときに初めて倶知安というところに立ち寄ったわけです。そのとき以来であります。そのとき以来、倶知安からこういうような講演依頼が来ていますよというようなことを大学のほうの事務局から連絡いただいて、久しぶりにぜひ顔出してみたいなということで本日お邪魔しているわけでありましてけれども、そういった意味で、非常に懐かしい思いがあると同時に、倶知安ってこういうところだったかしらということで、今からもう50年以上も前の話ですから、あまり変わってないなという思いをいたしております。

ただ、昨日、倶知安駅につきましたから、倶知安駅には何かあるだろうと。少なくとも売店なり食堂なりあるだろうという思いでいたのですが、出るまで何もありませんよ。えっとびっくりしまして、その駅を出ましたら、たまたまバスを待っておられたお嬢さん、お嬢さんといいますか、仕事をしておられる方の方ですけれども、自分は札幌にいますけれども、こちらでこれから、今日から2か月ぐらいアルバイトで倶知安で仕事することになりました。実は、今ここにきて、2時間前にきて、バスで何人かの人がそこで働くことになっているらしいのですけれども、何人かの人は迎えに来てくれる予定らしいのですけれども、自分は都合があつてバスでその勤め先まで行くことになっています。そのバスの時間を見ましたら、2分前に出発しちゃつた。それから次のバスの時間まで2時間かかるというので、ちょうど待っている時間なのです。その方に、私が声をかけたわけです。そうしたら、今、まだ2時間です。もう少しかかるそうなんです。ということで、そこで、その女性の方だったのですけれども、お若い方と時間潰すようなつもりで、そこでいろんな話をさせてもらいまして、そこで1つのコミュニケーションを取ったわけです。

やはりそういう点で、もう卒業、大学を多分卒業された方だろうと思いますけれども、アルバイトでこれから2か月間倶知安でお仕事をするのだということでありましたけれども、それだけやはりアルバイトしたりなんかしているという経験上、いろいろなこちらの話しかけに対しても、しっかりとした形で対応してくれたわけです。そういう点では、何か大変救われたような思いをいたしました。

それで、昨日は倶知安駅に着くまでの間、千歳から列車で参りましたがけれども、電車の中でも、いろんな方、子供さん連れのそういう親子とお会いしたり、あるいはお年寄りの方とお目にかかったりということで、いろいろと車内でこちらからいろんなことを話しかけたりしてまいりましたけれども、それぞれ話しかけると、皆さん、みんな、ほとんど臆面もなくちゃんと言葉を返してくださるということで、そういう点で、何か決してそういうようなコミュニケーションロスなんてことは本当にあるのかなと思ひながら、そんな思いで実はお伺いしたわけでありまして。

今日これからお話しさせていただく内容は、具体的な事例を通じて、多分小さいお子様のそういう、何ですか、おうちの方とのコミュニケーションを通じての内容と、あとはいわゆる一般の方がいろんなところで働いている、そういう働いている場所でもって起きているような会話の場面などを通じての話の内容であります。

それから、同じような内容ですけれども、こんなようなことが起きたときに、皆さん方であればどのように対応しますかというような、そんなようなことを幾つか事例として掲げて、皆さん方の御意見なども伺いさせていただけたらというふうに思っています。

時間も大分たってしまいましたのですが、最初に皆さん方に、最初のお子様の例を出しておきました。

事例1、事例2という、あるいは事例3のその例を出しておきましたですけれども、それを通じて、そのような例の場合に皆さん方であればどういうふうにお子様と対応するのかというような形で受け止めていただければと思います。

時間があれば、皆さん方にその最初の事例1の場合には、娘さんと父親との会話の例があります。その例などを実際に読み上げていただいて、こういうような場合にあなたならどういたしますかというような形でもっていきたいと思っているわけですけれども、時間の関係もございますので、私のほうで読み上げさせていただきたいと思います。

まず最初の事例1の例であります。

父と娘のある日の会話からということで、娘さんと父親の会話であります。その会話の内容でありますけれども、娘さん「パパ、来週の日曜、ディズニーランドに連れて行ってよ」と。父「何を言っているの。パパは日曜も仕事だ。たまに日曜が休みでも疲れているんだ。5年生にもなってそんなことも分からないのか。ママと行っておいで」、娘「ママとはこの前行ったよ」、父「じゃ、それでいいだろう」、娘「もういいよーだ。パパなんて大嫌い」という形で会話は終わっているわけですね。こんなことは日常、例えばお子さんなどをお持ちの場合には、幾らでもあることだと思えますけれども、このような対応の場合、皆さん方であれば、どのような形で会話を進めていくのか。この会話の娘さんのこの「もうパパなんか大嫌い」という形で会話が終わっちゃうわけですけれども、これ以上どういふふうな形でお父さんとの会話は進展していくのでしょうか。場合によっては、これで終わっちゃうわけですね。もうお父さんと娘さんの会話はここでおしまいですということで、これ以上発展しません。

ところが、そういうことというのは、日常、例えば小さなお子さんをお持ちの場合でも、十分あり得ることなのではないかと思うのですけれども、これが1つの例であります。

もう一つは、今度、男の子のことですね。お母さんの会話であります。その会話の例をここに出しましたですけれども、あ、ごめんなさい。ここではもう一つの例ですね。このお子さんの例をもう一つ、次のときに出したいと思ったのですけれども、ここに掲げたのはちょっと、プリントさせていただいたのは、これはあるお勤めの会社の中でのことあります。部長と課長の会話からということであります。時期はちょっと真夏のときに忘年会の話なんていうと、ちょっとずれているかもしれませんが、今の父と娘のある日の会話と、それともう一つの事例は部長と課長の会話からということから、課長「今度の会社の忘年会に1人9,500円で予約をしたいのですが、部長はいかがですか」というふうに部長に声かけたわけですね。そうすると部長は「それはいいね。A店なら1人9,500

0円は全くリーズナブルだ。僕も行きつけの店だしね。しかし、君、高いという人もいるんじゃないの」というような返答であります。それに対して課長は「高いですか」というような返事をするわけです。そうすると、部長は何も言わずに、黙ってたということでもありますけれども、こういうような会話の場合に、この背景にある、例えば娘さんがお父さんに対してディズニーランドに連れて行ってというようなことをお父さんに向けたその本人の気持ち、それと同じように、この会社の課長が部長に忘年会の予算の関係でこういうところでどうでしょうかという、この向けたこの気持ちですね。その気持ちをどんなような思いで、それに対して、それぞれがお父さんなり、部長が答えたその反応の仕方、そういう反応の仕方などを私たちは見ながら、どんなような思いを抱くでしょうか。これはただ、こういう言葉だけで、文章だけでもってこういう会話の一面を示されたのでは、なかなかその辺のところは理解できない、読めないところがあるかと思えますけれども、そのためには何が必要かと。

このような会話をする場合には、前提として、当然相手の表情です。相手の顔とか表情を常に私たちは見ながら、その反応を期待するわけでありまして。そういう反応を期待することによって、この両者の会話の内容も、あるいは受け止め方も大きく変わってくるはずであります。私たちが日常会話をするときには、どうなのでしょう。ただ、相手が見えない、そういう一方通行の、あるいは単なる電話だけのそういう話、コミュニケーションという場合と、実際に面と向かって相手の姿、顔、形を見ながら、話しっぷりなどを見ながら、それに対応して話を向けている。かなりの違いがあるはずであります。私たちがコミュニケーションをするという場合には、そういうような相手の表情を常に読みながら、そういう会話を重ねていくことが大事なのではないかと思うのです。コロナが蔓延して以降、会社などを中心に、今はほとんど自宅待機しながら、そういうオンラインによるところの会社の同僚とのやり取りが中心であります。そういう時代になっちゃっておりますけれども、しかし、特に教育現場などに携わっている御出席の皆さん方の場合には、今、大学なんかでも大分対面教育に戻ってきています。戻ってきていますけれども、オンライン教育というものも一方においてやっています。そのオンライン教育も大分定着してきています。しかし、オンライン教育だけのそういう教育の段階と、一対一の対面教育のその場合を皆さん方はもう経験上十分お分かりだろうと思えます。その両者の違いというものはそれぞれの利点、欠点を十分お分かりだろうと思えますけれども、両方とも否定するわけにまいりません。しかし、どちらか一方ということになりますと、当然のことながら、そこに弊害が生じてきます。今、日常生活の場において問題化されているのは、このいわゆる対面でのコミュニケーションがこのコロナ禍の中でどんどん薄れてきているわけですね。その結果として、どういうことが起きているかということでもあります。いわゆるひきこもりというようなことなどが、このコロナなどによってどんどん増えているわけがあります。そういう一つの要因であり、あくまでも一つの要因だろうと思えますけれども、そういうようなひきこもりなどをどんどん助長させているようなその要因にもコロナ禍とい

うものも大きく関わっているのだらうと、私などは見ているわけでありませぬ。

ですから、例えばスーパーに行っても、スーパーの店員さんに声かけることができない。実際に、何かこれどういふ品なのだらうかということを知りたくても聞けなくて、店員さんのレジのところであらうあらうあらうしているというやうなそういう人も結構いるのだらうであります。それはなぜか、これも一種のそういう日常生活の場において、家庭内の中でも、ずっと、例えば宅配便が来ても一切宅配便、うちにいながら、お父さん、お母さんがうちにいても、自分がすぐ出られる立場にありながら、ピンポンと鳴って、出ていかない。一切人と接しようとしなぬ。そういう宅配便1つ受け取るにしても、暑い中、御苦労さまでございますという、そういう一言が出ないのですよね。その一言が発せられるということが、そもそもコミュニケーションの第一歩なのです。そういうことをどんどんどんこのコロナ禍ということの中であって、ますます増長させているのではないかという気がするわけですがけれども、話がそういうやうなものにどうしてもいってしまいますけれども、ともかくも、こういう中において、娘さんのこのお父さんにディズニーランドに連れて行ってよと。今日は日曜日なんだから。当然お父さんはお休みでしょう。その背景には、娘さん自身は、とにかくパパと一緒に過ごしたいのだという、そういういわゆるお子さんの望み、希望が、本当に僅かな希望なのですけれども、そういう思いが強く働いているわけですね。それをお父さんが察してやらないことには、お子さんは、娘さんは救われぬわけでありませぬ。

それと同じやうに、これは少し内容は違ふかも知れませぬけれども、課長が部長に相談した、この忘年会の会費を9,500円でやりたいと思うのですけれどもということに対して部長の答えた、中には高いという人もいるだらうという、そういう言葉の背景には、部長自身もちょっと高いんじゃないのと、そういうものをいわゆる費用として使うのはどうだらうかという思いも、もしかしたら働いているか知りませぬ。もっと安くできないのか、そんなやうな思いを私たちは日常、毎日毎日の生活の中で、お互いにそういう気持ちを抱きながらコミュニケーションを交わしているわけでありませぬ。お互いにもう既に大人になっているわけですから、あからさまに表情に出すわけにはいきませぬ。しかし、どちらかという、表情を見れば、そのやうな課長が部長に言ったときのその部長の返答の仕方によって、あ、ちょっとこれ考えなきゃいけないかなと、まさにそういう部長の表情から自分の進めたいと思ったことに対してちょっと考えてみようかなというふうには思いが変わると、考えてみようというやうなことになるかも知れませぬ。そんな例をここに出示させていただきます。

それから、3番目の例として、これ、やっぱり男の子とお母さんの会話であります。ところが、男の子は、お母さんと会話をしている段階で、お母さんの対応のしかたによって、だんだんと自分自身が言っていることに対しては無理もあるなど、だんだんと建設的な、今までは否定的な気持ちでサッカーを辞めたいのだという気持ちになっていながら、その気持ちがだんだん前へ肯定的になっていくわけですね。そういう1つのプロセスがここに感

じられるわけですが、その例をそこにありますような事例3として掲げました。

僕、サッカークラブを辞めたいなということでもあります。

この対話例をAとBに2つの例を掲げさせていただきました。この例を見て、AとBの間にその男の子のその思いがかなり辞めたいという気持ちばかりが強く働いている気持ちが、だんだんとお母さんの対応の仕方によってかなり前向きな姿勢に変化しているという、そういうプロセスが感じられるわけです。その例を事例3として掲げさせていただきました。

そこで、まずAのほうを読ませていただきたいと思います。

息子さん「最近サッカーだるくてもう辞めようかな」、母「急に何を言ってるの。甘えたこと言わないの」、息子「だって、俺、なかなか上達しないんだよ。センスがないんだよ。きっと」、母「それはあなたの思い込みよ。少しずつ上手になっているわよ」、息子「でも、同じときに始めた〇〇はドリブルだって長く続けられるのに、俺はいつまでたってもできないんだ」、母「お母さんはあなたぐらいの頃、そんなことで諦めたりはしなかったわ。見返してやろうと思わないの」と、かなり批判的なのですね。息子さんが言っていることに対して否定的なそういう思いをここでお母さんは出しているわけですね。見返してやろうと思わないのという、こういう言葉まで発しているわけです。息子「それに足も遅いし、運動神経鈍いし、もともと不利なんだよ」、母「そんなふうに自分を卑下するなんて……、誰かにそんなふうに馬鹿にされたの。正直に言いなさい」、息子「うるさいな。とにかくもう嫌なんだよ」、母「頑張れば、あなたなら必ずできるわ」、こういうふうに一生懸命勧めているわけですね。息子「お母さんは俺の気持ちなんか全然分かってない。サッカーのことなんて何も分からないくせに勝手なこと言うなよ。そんなこと言うなら、自分でボール蹴ってみろよ」と、当然のことですね。こういう男の子からすれば、当然こういうようなお母さんのそういう物言いに対して、こういう言葉が当然出てくるかと思うのですけれども、こんな会話であります。

こういう会話、男の子とお母さんの会話に対して、同じ内容なのですが、その内容に対して、今度はBのほうの例を掲げました。そうすると、この息子さんのほうに、自分は辞めたいのだという気持ちに対して、そこに1つの進歩が、前向きな進歩が伺えるということでもあります。

まず、対話例B、息子「最近、サッカーだるくてもう辞めようかな」、母「サッカーがちょっとつらくなってきて、もう辞めたいという気持ちになっているのね」と、これ息子さんの気持ちを、その息子さんのつらい気持ちをお母さん、受け止めているわけですね、ここでは。最初から、何言ってるのというような否定的な気持ちではなくて、息子が辞めたいという気持ちをそれを一応肯定して受け止めようとする姿勢があります。どうでしょうか。皆さん方も同じようにお子さんのそういう物言いに対して、まず頭から否定するのではなくて、一旦は受け止めてやるというようなことがそこに表れているのではないかと思うのですね。「だって、俺、なかなか上達しないんだよ。センスがないんだよ、きっと」、

そうすると、母「なかなか上達しない原因をセンスがないからだと考えているのね」と、それをまさに受け止めているわけですね、息子のそういう気持ちを。「うん。だって、同じときに始めた〇〇はドリブルだって長くできるのに、俺はいつまでたってもできないんだよ」ということですね。正直にその自分の辞めたい気持ちを母親に向けているわけです。それに対して、「そんなの〇〇君のできることができなくて、がっかりしているのかしら」というふうに一応その息子さんの言葉を受け止めるわけですね。受け止める。これ大事な点だと思うのですけれども。すると、息子「うん。それに足も遅いし、運動神経鈍いし、もともと不利なんだよ」、そうすると、母「自分の足が遅くて、もともと不利だと自信をなくしているのかな」、ともかくも、息子さんの言うことに対して、最初から否定するという、そういう気持ちで、そういう言葉を否定的な言葉を発しないのですね。ともかく柔らかく受け止めているわけです。受け止めていると。そういう会話の中で、自然と今度は息子さん自身が肯定的な自分自身辞めるという気持ちを逆に肯定的なほうに転換していくというさまがここから伺えるわけです。

息子「まあ、俺より足が遅いやつもいるけど、俺の真剣さが足りないのかもな」というふうにごでこでお母さんのそういう物言いに対して、自分の足の遅いことに対しても、自分自身でこで息子さん自身も認めようとしているわけですね。「そう。真剣さが足りないようにも思えるのね」と。息子「朝ランニングしたり、コーチの注意をもっとよく聞いたら、何か変わるかもしれないな」と。自分自身がそういう姿勢がちょっと足りないのかなと。お母さんのそういう自分の物言いに対して受け止めてくれるその答えに対して、息子さん自身は自分の欠点、そういうことに自分は気がつきながら、こういう返答するようになっているわけですね。すると、母「自分で努力したら変わるかもしれないと希望を感じているわけね」ということですね。ここでもかなりもう息子さん自身の肯定的な気持ちも、お母さん自身も受け入れるということでもあります。こういう息子さんとの会話、これはもうお母さんにとってみれば成功ですよ。見事にお子さんの、息子さんのサッカーを辞めたいという気持ちを転換させているわけです。息子「もう少し頑張ってみようかな。母さん、パワーが出るように夕飯は俺の好物のハンバーグにして」という形で、母と息子さんの会話はここで終わっているわけです。どうでしょうか。同じサッカー辞めたいという息子さんの気持ちを聞いたお母さんのその対応の仕方によって、息子さんの気持ちがこのように変化しているという、そういう1つの例だと思います。コミュニケーションのそういう意味での難しさ、大切さというものをつくづくと感じさせられる例なんじゃないでしょうか。日頃皆さん方は、ともするとそういうようなことで、自分も最初のAのほうの例のような形でもってお子さんに接しているんじゃないかというふうに、そんな思いを抱かれている方もいらっしゃるかと思いますけれども、自分のやっていることは決して間違いではないかと、そういうふうにはできるだけお子さんの気持ちを全面的に頭ごなしに否定するんじゃないかと、ともかくも受け止めてやろうというようなことが大事なんじゃないでしょうか。私たちがいろんな社会生活をしていく上において、社会ではいろいろな場でもって

いろんなグループと私たちは関わりを持つようになります。そういうグループの中で、全く自分自身が1人であるということはまずあり得ません。そういう中で、大きい、小さい関係なく、社会の一員になる以上は、当然そうした社会の一員同士のコミュニケーションというものを常に頭に置きながらしていくということが大事なんじゃないかなという気がするわけであります。

これは非常に身近な例として掲げた一つであります。

○司会 坂詰先生、ありがとうございます。

大変途中で申し訳ありません。ちょっとここで一度少し休憩を取らせていただきたいなと思っております。皆様、大変盛り上がっているところ申し訳ありませんが、ここでコロナ感染対策のために、5分間の換気と休憩を行いたいなと思っておりますので、御協力のほどよろしく願いいたしたいと思えます。

○坂詰氏 どうぞよろしく願いいたします。今、指摘されたのですね。前もってさんざん言われていたのですけれども、御承知に漏れず、私は必ず忘れるのですね。今眼鏡をかけて、行ってくるよと言いながら、あ、忘れたと言って、何忘れたのとうちの嫁に言われて、眼鏡忘れたって、かけているのですよ。かけているのですけれども、すぐ忘れるという、もう完全に先行きはもう分かったようなものでありますけれども、そんな状況なものですから、どうも御指摘ありがとうございました。よろしくどうも。

それでは、これから少し休憩を取らせていただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

(01:12:00 まで)

(01:16:56 から)

○司会 坂詰先生、よろしく願いいたします。

○坂詰氏 はい。どうも皆さん、御協力ありがとうございました。

それでは、後半のほうに移ってまいりたいと思えます。

次に、今度は事例4のほうに入ってまいりたいと思えますけれども、ちょっと話が別の話になってしまいますけれども、あれでしょうか、今日御出席の皆さん方の中に、結構北海道には東洋大学の出身の方がいらっしゃるのですけれども、大変失礼ですけれども、ここに東洋大学御出身の方いらっしゃいますか。どなたもいらっしゃいませんか。皆さんみんな北大でしょうか。(笑) 大変失礼いたしました。

実は、昨日、前泊という形で倶知安に入ったのですけれども、友人が、今、余市に住んでいまして、そして、定年まで小樽の潮陵高校の教員をやっています、彼は私と非常に同じような分野の研究をしており、著書というほどではないのですけれども、本を3冊共編で出しているのです。その彼が、北海道に来てから方言研究を専門的にやるようになりまして、後志を中心にした方言研究をやっています、今、北海道新聞なんかで後志のそういう代表的なといえますか、主立った後志の方言、言葉などを北海道新聞に10回ぐら

いでしょうか、連載をちょっと前までしていましたですね。ひょっとしたら御覧になられた方もいらっしゃるんじゃないかと思えますけれども、見野久幸という方であります。非常に地味な人間なのですけれども、その見野さんと実は昨日お目にかかって、倶知安でこういうような話でお邪魔することになったのだと言いましたら、ぜひ、お互いに先がないのだからと。見野さんは80歳を迎えたばかりのようですけれども、私はこの10月で83になりますが、もう先行き会えるかどうか分からないという、そういうことで、ぜひ会っておきたいということで、見野さんはわざわざ小樽まで、余市から小樽まで、ちょうど小樽まで飛行場から終点なものですから、小樽まで、小樽の駅で彼は待っていてくれまして、小樽から余市までは3駅なのですけれども、その3駅でも一緒に電車の中で話ができればこんなうれしいことはないということで、昨日見野さんと久しぶりに会うことができました。

日頃、大体1か月に一遍ぐらいはお互いの音信を電話ではやり取りしているわけですが、何せ遠いものですから、会いたくても会えないということで、お互いに、私はもともと東京の深川の生まれなものですから、彼が東京にいるときには、私の実家のほうにも何度か行き来してしまっていて、板橋というところに彼は下宿していたのですけれども、そんなときに彼と知り合って、その関係上、今度は国に帰るときに一緒に岩内に行きませんかということで、岩内にお邪魔して、そのお邪魔したときに、すぐ近くに雷電温泉というのがあります。雷電温泉に連れて行ってもらって、そんな思い出が今よみがえってまいりました。そのとき以来でありますけれども、見野さん自身も、小樽駅で会ったときには、かなり白髪になっていてびっくりしまして、コロナの影響もあって、ワクチンの影響で肩を大分痛めて、左肩が上がらないのだなんていう、そんなような、会うとそんなような話ばかりということ、まさに皆さん方は日常を既に交わしている方が多いんじゃないかと思えますけれども、コロナというのは怖いですね。今頃になって、かなり後遺症があっちこちに出ているようでございますので、くれぐれもお気をつけになっていただきたいと思えます。

私自身も実はこういうふうにして今お話ししていますけれども、ついこの間までは、もう本当に知らない人がいないぐらいに、例えばセンター入試などで朝からずっと監督をしたときに、他の監督の人に全部座ってください、私は責任者の立場で言うと、どうぞ、先生こそ、座ってくださいと。私は一度も座ったことはありません。朝から、自慢するわけではなくて、自分自身できないのですよね。どうぞ、皆さん、座ってくださいと。私はずっと立ってますからということで、センター入試を何度か経験してまいりましたですけれども、そのセンター入試なんかでも、まず座ったことがないのです。今回も椅子を用意してくださいましたですけれども、そのときの癖が出てきまして、座らなくても大丈夫かなと思っているのですけれども、さすがもうこの年になりますと、昨日ちょっと歩いただけで、朝起きるのが大変だったんです。腰が、実はもともと在職中からいわゆる脊柱管狭窄症、皆さん方の中にもいらっしゃると思えます。背骨の何番目かが、私の場合は4番目

か5番目だと言われているのですけれども、精密検査を受けて、そこが悪さしていますよと。そこを手術するのですかと医者に尋ねると。手術まではいかないというのですけれども、だんだんとやはりひどくなってきているのですけれども、ただ、それをごまかしごまかし、毎日どうしているかという、私の日常は近くの整形外科に電気とか超音波をかけに行っているだけです。毎日何しているのという、それだけです。そういう毎日を過ごしています。自分自身でもかつての自分であれば、信じられないです。しょっちゅう巢鴨の駅から白山の大学まで20分ほどですけれども、もうちびのくせに、ちょこちょこ歩いている姿は、バスの中から、あんた、歩いていたでしょうと。いつも同僚や他学部の先生方に声をかけられたりしていたのですけれども、今は残念ながら、ちょっと歩くと休まなければならないような、そういうふうになって、実に情けない思いをしているわけでありませう。ちょっと大事な話の途中で申し訳なく思いますけれども、そんな状況であります。それでは、事例の4のほうに入っていきたいと思います。

これも日常ちょっと感ずることかもしれませんが、これはある女子社員の方が、その中で起きたようなその会話の一場面を取ったものであります。それを見てみたいと思います。

アキコさんは38歳のOLです。支店長会議に必要な弁当の手配を頼まれました。終わって片付けをしているときに、支店長3人から今日の弁当はまずかったと言われたのですね。まずかったと言われてしまいました。次回からのこともあるので、弁当屋の主人に電話をかけましたと。アキコさんの言葉、「すみません。今日のお弁当まずいという意見が結構あって、今後何とかありませんか」と電話したわけです。そうすると、お店の主人が、「まずいって。あんたね、うちの弁当にいちやもんをつける気なの。生意気なんだよ、あんた」、ちょっと極端かもしれませんが、そういう主人の電話の言葉が返ってきた。アキコさんは逆にむっとして、「生意気。まずい弁当のことをまずいと言ってどこが生意気ですか」と。主人「その口調が生意気なんだよ。素人のあんたに言われたくないね」とアキコさん「そんな言い方はないでしょう。分かりました。もうおたくからは今後一切弁当取りませんから」という形で会話は終わっているわけです。これで、もう両者の会話は終わっているわけですが、その後が、実はあるんですね。アキコさんはどうしたかという、実は上司から、上司のところはその弁当屋の主人から電話が、文句の電話がいつているのですね。それが次のところでありませう。

翌日、アキコさんは上司の部長に呼ばれましたと。部長「昨日は弁当屋の主人にひどいことを言ったらしいね。私に電話をしてきたよ。長年、いろいろとお世話になってきた弁当屋なんだけど、どういふこと」と。逆にそのアキコさんを叱ったわけですね。部長の言うことで。アキコさん「先方は何と」と、部長「弁当がまずいと難癖をつけて、今後は一切取引中止だと言われたって。君にそんな権限があるのか。問題だね」と部長はそういう返答をしていたわけです。長年取引のこともあって、そのやり取りの場面、そのものは部長自身も存じ上げないわけでありませうけれども、その店主から言われたことをそのまま真に受けて、部長はアキコさん呼び出して、そういうことを言ったのだらうと思いま

す。「先方は何と」と、そうすると部長「弁当がまずいと難癖をつけて、今後は一切取引中止だと言われたって。君にそんな権限があるのか。問題だね」という形で、アキコさんは叱られたわけですね。とアキコさんは、立場上、申し訳ありませんと謝らざるを得ないですね。謝ったわけです。部長、「私が上手に取りなしたけど、今後は発言に注意してくれよ」と。あんたにそんなことを言う資格があるのかと、今後、長年お世話になっていた弁当屋の主人にそんなこと言う権限、あんたにあるのかと部長に逆に叱られちゃったわけですね。

その後日談であります。アキコさんはその後どうしたか。今度、アキコ、「先日は大変失礼な物言いをして申し訳ございませんでした」と謝ったわけですね。そうすると、今度は、弁当屋の主人「いや、本当失礼だったね」、アキコ、「大変御迷惑をかけました」、主人、「だけど、僕も大人げなかったね。つかっとなってしまって」、アキコ、「こちらこそ感情的になってしまい、おわびの申し上げようもありません」、主人、「あれからよく考えてみたんだけどね、そちらがお客様なんだから僕のほうが悪いよ」と。逆に、その店の主人のほうがそういうふうに謝ってきた。「ところで、何であんなことになったんだっけ」と、アキコ、「支店長会議のお弁当のことでした」という、そのことを説明するわけです。主人、「ああ、そうだったね。まずいと言われたね」、アキコ、「はい、そうなんです。そちらのお弁当は日頃評判がいいのに、あの日に限って3人の方から指摘を受けて、私もお尋ねしてみたらどうかなということ」、そういうことで電話したわけですね。「私もお尋ねしてみたら、どうやら肉が硬かった上に、揚げ物を揚げ過ぎていたらしかったようです。年齢層が高かったので、余計気になったらしいのです」と、そのありのままの形を主人に伝えると、主人、「あ、そうなの。そういう声は大事にしなくちゃね」、お客様の声ですからね。ということ、すると、「ありがとう。僕はそういう御意見をいただくに生意気な口を利いて、かえってごめんなさいね。ごめんだね。厨房の人間にしっかり伝えておくよ」という形で、今度は主人のほうも折れて、そういう対応をしてきたわけですね。アキコ「そうおっしゃっていただけると助かります。どうかこれからもよろしく願います」、主人、「こちらこそですよ。どうかこれに懲りずによろしく願いますね」ということで、うまくその弁当屋の主人とアキコさんはここで収まったわけでありすけれども、こういう会話の一場面でありすけれども、これ、私たち日常、ちょっとした買物をしに行ったときでも、幾らでも経験しているようなことであります。ということですね。あるいは、レジに対応しているレジの係の女性の方の対応をめぐって、結構そういう人は多いのですけれども、年配の男の人が多いのですけれども、私なんかは、川越のスーパーへ行っても、立派なそういう年配の男性が怒鳴りつけている、店員さんを怒鳴りつけているような、そういう姿を見る場合もあります。

そういう私自身も、ときにはそんなようなことをしでかしてるか分かりません。時にそういうこともあるのですね。あまりにも、どうしてもアルバイトの方が多いものですから、レジに慣れないような、そういう店員さんなんかにはぶつかる、ついついお客である自分

自身が頭にきてしまって、つかっとなつて、言わなくていいこと言ってみたりというようになるのですね。これはどうしても、そういう感情的になってしまうという、そういう一つの例だろうと思いますけれども、しかし、お互いに後になってみれば、何ていうことはないのですね。そういうような形で、最終的には穏やかに収まることなのですけれども、日頃、私たちはこういうことを繰り返しているわけです。そういう繰り返しの中で、毎日毎日の生活を送っているんじゃないかという気がするわけであります。

以上が、実はそのような会話を通じての事例の問題でありますけれども、ちょっと話の内容は変わりますけれども、今度は家庭内のそういう事柄に少し関わる問題でありますけれども、これはその4ページ目にありますような、こんなようなときにあなたならどうしますかということであります。

今日、御出席の皆さん方にもぜひお尋ねしたい事柄でもありますけれども、こんなときに皆さん方ならどういうふうに対応しますかと。幾つかのパターンが考えられます。考えられますけれども、これも対応の仕方によって、大きく変わるわけです。対応の仕方によってはそこでもって、夫婦であってもすぐけんかになってしまうということで、あるいは頭ごなしでもって、奥さんを怒鳴りつけてみたり、あるいは逆に奥様から叱りつけられたりというようなことなんかもあるわけですが、そんな1つの例かと思えますけれども、そのような例をここに、このようなとき、あなたならどうしますかと。自分の気持ちを相手に伝えるということの例であります。

それでは、早速ですけれども、ヨシダさんは退社をしようとしたとき、上司から呼び止められて、思いがけない仕事を言いつけられました。実際に、ここに御出席の皆さん方の場合に、ほとんどいわゆる教員室、教職関係の人の場合には教員室のそういう中でのことかもしれませんですが、そういう中でも、そういう教員室の中の上下関係というようなこと、そんなところから発生することかもしれませんですが、ここではそういう中で起きた上下関係の中からできたことでもあります。

ヨシダさんは退社をしようとしたとき、上司から呼び止められて、思いがけない仕事を言いつけられました。もう時間になって、今日の勤務は終わったのだ。これから帰ろうかなと。もちろん帰った後、実はうちの者との約束があって、そこに行く予定でもあったわけですね。その矢先に、呼び止められたわけです。ということですね。思いがけない仕事を言いつけられました。「ちょっと予定があるので」と断ったわけです。ところが、その断ったのが、上司なものですから、その上司は何を言ったかということ、「何を言っているのだ。どこから給料が出ていると思っているのだ」と、今どき、こんなことを言うような上司がいたら、まさに問題だねでありますけれども、しかし、実際には現場ではあり得るのですね。いろいろな職場で、こういうことは現実問題として起きていることではありますけれども、そんな例であります。「ちょっと予定があるので」と断りましたが、「何を言っているのだと、どこから給料が出ていると思っているのだ」と怒鳴りつけられた。今どきちょっと考えられないかも分かりませんが、現実にはあり得ることでもあります。

1時間の残業を強制されましたということですね。大切なことなのだろうと思うのですが、それでも、その1時間の残業を強制されました。実は、その夜は家族で食事に出かけることになっていて、待たされた妻は「いつも約束を破ってばかりなんだから」、今日始まったことではないのですね。「家族のことをどう考えているの」と、「その日の仕事が終わっているんだったら」、奥さんの言うとおりでですね。もうその日の仕事をちゃんと時間で終わっているのだから、当然帰っていいんじゃないのということでもあります。それが前提でありますけれども、「終わってるんだったら、家族のことをどう考えているの」と言われてしまうわけですね。その仕事が、「その日の仕事は終わっているのだったら、きちんと断ればいいじゃないの」と、当然奥様のせりふであります。ということでもあります。よくあることでもあります。「あなたのことだから、何も言わずに、課長さんの言うままに仕事をやっていたんでしょ」と。痛いところをつかれましたですね。「ねえ、私の話聞いているの」とヨシダさんを責めました。ヨシダさんは、たじたじであります。

ヨシダさんはこれにどう答えればいいのかという、こういう問いかけであります。まさにこのような場合にあなたならどういたしますかということでもあります。

幾つかのパターンが考えられますけれども、最も、そこに最初に示したのは、攻撃的な返答、奥さんに対する攻撃的な返答の仕方だと思うのですが、奥さんの攻撃的な答えとして、そこにありますように、ほんの例で、一例ですみませんけれども、いろんな攻撃の仕方があるのだろうと思いますけれども、「うるさいな、そんなに大声を出さなくても聞こえていますよ」と、「仕事も家族のためにやっているんだよ。少しは俺の身になってくれないだろう」と。こういうときに男性は、とかくちょっと不利になると誰のために俺は働いているんだと。おまえたちのために働いてるんじゃないかと、二言目にはつい言ってしまうがちでありますけれども、そんなような言葉がつい出てしまう。「そんなに言うんなら、勝手に俺を置いて出かければよかったんだ」というような、そういう返答を、まずヨシダさんはしたと。このような返答の場合には、いわゆる攻撃的な返答であります。強い気持ちで言われたものですから、そのまま強く返すという、そういう返答であります。これが1番目であります。

それに対して2番目の返答はどうかというと、これはもう少し柔らかであります。「ごめん。きちんと断ったんだけど、課長は聞く耳を持たない人なんだ。せつかく出かけるんだから、そんなに怒らないで、少し楽しくやろうよ。これからは気をつけるから」という自己表現的答えという、と書いてありますけれども、こんな御主人であれば、多分家庭円満になるか分かりません。ただ、奥さんの気持ちは割り切れないと思いますけれども。こういう返答の仕方もあるのだということでもあります。これならうまくいくのだろうと思うのです。これはこの御主人のほうが、ある面においては上かも分かりません。実際によくあることでもあります。

それから、3番目の例としては、これはどういうことかということ、ここにごめん……。あ、そうじゃなくて、あ、ちょっと抜かしましたですね。2番目の受け身的な答えです。

受け身的な2番目の答えをちょっと飛ばしてしまいましたけれども、2番目のほうは、「一応課長にはこういう事情だということを言ったんだけど、聞いてくれなかったんだ」と。

「だから、仕方がないだろう」というような、こういう1つの言い訳ですよ。これがいわゆる受け身的な答えということでもあります。

それから、今、先回りしてしまいました。3番目のような自己表現的な答えという、こんないわゆる3通りの答えが考えられるかと思えますけれども、さて、皆さん方の場合には、どういうふうないわゆる回答を、あるいは返答をなさるのでしょうかということでもありますけれども、いかがでしょうか。皆さん方だったら、こんなようなときに、1番目の攻撃的になってしまうでしょうか。あるいは、そのとき、その場のその奥様の言い方に対して、その言い方次第によっては攻撃的になってしまったり、あるいは2番目のようなそういうような返答になってしまったりというようなものになるのかもしれないけれども、それによって様々なことがありますけれども、どちらかという、私自身はどっちかという、あまり柔らかではないんですね。これは家の者のそういう対応の仕方にもあるのですけれども、結構私の場合には厳しいのです。私は優柔不断なものですから、「断ればいいんじゃないの、きちんと」と。「そういう断り方も分かんないのだ」と。「何でも言いなりになって」ということで、「何もかも、何でもかんでもにこにこしながらやってきたんでしょ」なんていうようなもので、そこからだんだんだんだん感情的になってしまう。要するに、私自身が長い間、43年間、東洋大学で警察沙汰にならずに済んでこられたのも、あんなのようなそういう優柔不断な人畜無害な人間だからそれができたのだろうというようなことなのだろうと思うのです。私の家の者だったら平気でそういうことを言われそうでもありますけれども、結構私の家の者は厳しいのです。ですから、私は言われっ放しではありません。こっちも頭にきますから、ついこちらも攻撃的になるのです。その次は何かというと、「もう絶対におまえの言うことなんか聞いてやるものか」とか、というような、そんなようにすぐ高飛車に出ていってしまうのです。今でもうちの者がちょっと今、北海道なんかにはありますけれども、私の家の者は埼玉県のいのちの電話の相談員を埼玉の相談員の第1期生から務めてまして、今年で31年になるんじゃないかと思うのですけれども、そのいわゆる長年務めているのです。今もう辞めたらと私は言うのですけれども、かなり足がやっぱり不自由になって、そして、本部が大宮にあるわけです。私は川越なのですけれども、川越から大宮まで埼京線と、今、昔の川越線ですけれども、それで行くと25分なのですね。そこから杖をつきながら、その本部のほうに出かけるわけです。そうすると、駅までのいのちの電話の今日は会合があるんだなということ、あるいは相談の日の今日は当番なのだということになると、大宮まで行くのです。そうすると、川越の駅までアッシー君を私が務めているわけです。自分のアッシーもままならないのに、まだ、一応免許は持っているものですから、駅ぐらいまでは送れるというので、送り迎えをするわけです。そんなようなことをしているものですから、そうすると、相手の弱いところをもう絶対に車の送り迎えやらないからと脅すわけです。まさにそれこそ攻撃的なものですね、

ひどいぐらいですね。それが高ずると、「そういうのはあんたはパワハラだ」って言うわけですが、パワハラ。そういう「何がパワハラだ」っていうことになって、そうするとしばらく口を利かないというような非常に険悪な状況になるのですけれども、そんな話をすると、そんな何か虫も殺さぬようなにこにこした顔をして、ひどいことを言うねというふうに、御出席の皆さん方から怒られそうでもありますけれども、時には、もともと東京の深川のべらんめい調のところまで育ったものですから、もう悪い言葉を言い出したらもう止まりません。何を言うか分からないという、そういう激しいときが若いときからありまして、普段は全くにこにこしているんですけども、いざというときには止まらなくなっちゃうんですね。自分自身ではそういうところあまり見せたくないのですけれども、よほど見せませんですけども、いざというときには、ですから、私がちょうど大学改革があったときに、そうそう、平成12年の全国の大学の改革があったときに、ちょうど文学部長をやっている、東洋大学の文学部は教員が150名いたのです。その文学部の教授会は2時半から始まって、その大学改革のときは夜10時、11時当たり前だったのです。それをいろんな意見が出て、それを私はトイレ一度も立つことなく、それでもって、いろんな激しいこと言うと、「もう遅いからやめましょう」と言っても、「いや、やりましょう」と。「明け方までやりましょう」と。絶対、私は顔に似合わずではありませんですけども、とうとう引きませんでした。そのぐらいに強情と言えれば強情なのですけれども、それで、その時期を乗り越えてきたわけです。そういう点では、何かあれば絶対負けないよと。例の大学紛争のときなんか、その学生なんかの対応についても、そういう点ではそういう激しい学生なんかにはいつも一緒になってそういうようないつでも対応しようじゃないかと、話し合おうじゃないかというようなことがあったりしました。そういうことを耐え抜いてきたものですから、少しぐらいのことでは、暴力には負けますけれども、へこたれないよというような思いは、もともと私自身には持っていますので、教授会で長引こうと、あしたの朝になろうと、もっと頑張りましょうということで、さすがに先生方のほうが疲れちゃうんです。「もうやめましょう」ということで、それで常にそれで、「今日は、じゃ、それまで」ということで、乗り越えてきた覚えがあるわけですけども、そういうやはりあまり極端もよくないですけども、1つのそういう強い信念を持つということは皆さん方にとってもある面では強情ということとは、また違う意味で必要なんじゃないかと思うわけです。これからコミュニケーションを重ねる上において、いやでも応でもコミュニケーションは自分と相手が常にいるということであり、そういう関係を保っていく以上は、自分自身にしっかりとした何か信念、強い信念を持ってやっぱりいくということが大事なんじゃないでしょうか。何か言われると、へこへこ、みんなその都度その都度いかようにも豹変してしまうような、そういうようなことであってはいけないんじゃないかと思うのです。もちろん内容によりけりではありますが、日頃は何でもかんでもあの人、何でもひよいこひよいこ思いを変えてるなんて思うかもしれないけれども、いざというときには、絶対これ以上のことは曲げられないというものが皆さん方お一人お一人

人おありだろうと思いますけれども、その信念だけは絶対にどのような場であろうと、決して曲げてはいけないことだろうというふうに思います。コミュニケーションの場において、最も大事な事柄は、その辺のところにあると思うのですけれども、これは最後になりましたけれども、最後に言葉によるコミュニケーションとして知っておきたいことという当たり前のこと、今さらこんなことをおまえに言われたくないよと、そのとおりでと思います。ですから、改めて、こういうことを再確認するという、していただければということ、そこに列挙したわけでありましてけれども、コミュニケーションというのは常にそこに人間が介在しているということで、人と人とのそういう関係から生まれてくることでもありますから、そのことを決して忘れてはいけません。言葉というものは人間自身に与えられた最高の産物であります。言葉というのは、本来言葉の機能というものはどのようなものなのかということ、これを再確認することによって、私たちが使う言葉のその一つ一つの大切さ、重さというものをやはり確認する必要があるんじゃないでしょうか。私たちがコミュニケーションを言葉を通じてするときには、言葉遣いは、使う言葉そのものには、常に優しさがなければいけませんということですね。それと同時に、その発する言葉には、当然強さがなければいけません。それと同時に言葉を使う人間自身が誠実、誠意を持ってその言葉を発するということだろうと思います。そのことを忘れてコミュニケーションというのは成り立たないというふうに思います。言葉は非常に怖いものであります。あるときには、人のそういう心を大きく慰めるそういう力になります。しかし、あるときには、今ちょっと申し上げましたように、武器にもなるわけです。相手をやり込めるそういう怖い武器にもなるのだということです。そのことを十分認識してこれからのコミュニケーションのある毎日の生活をしていっていただきたいというふうに強く感じる次第であります。

大変、不十分なお話になってしまいましたですけれども、これから皆さん方から質問を受けたいと思いますので、質問がございましたら、そういうような皆さん方から出される発問に対しては、正確に答えられるようなそういう立場ではございませんですけれども、ございましたら、ぜひ御発問いただきたいと思います。

ひとまず、以上でもって、私の非常につたない話でございましたですけれども、ここで閉じさせていただきたいと思います。暑い中、どうも御清聴ありがとうございました。失礼いたしました。（拍手）

# 後志教育講演会

東洋大学講師派遣事業

期日 令和五年八月二日(水)  
会場 倶知安町文化福祉センター  
公民館大ホール

演題 「あなたは気持ちを言葉で表していますか？」  
講師 坂詰 力治 氏  
—よりよいコミュニケーションを目指して—



祝辞 後志教育局長 新居 雅人 様



主催者挨拶 所長 長谷川 誠



謝辞 副所長 葛西 良信



来賓の方々



来賓紹介 所員 金田 唯史



会場の様子



講師紹介 事務部長 木村 和義



花束贈呈 所員 大塚 葉月



東洋大学名誉教授 坂詰 力治 講師